

批評と紹介

雲南省社会科学院東巴文化研究所編訳

納西東巴古籍訳注全集 全一〇〇巻

黒澤直道

1. ナシ（納西）族の「トンバ（東巴）経典」と

その翻訳・注釈

中国雲南省西北部の麗江県を中心とする地域と、それに隣接する寧蒭県、中甸県、維西県、さらに四川省の一部の地域に居住する、人口約三二万人（二〇〇〇年統計¹⁾の少数民族であるナシ（納西）族は、これまで「トンバ（東巴）経典」と呼ばれる特徴的な宗教経典を持つことによって強く印象づけられてきた。「トンバ経典」は、「トンバ文字」と呼ばれる独得の文字によって書かれた宗教経典であり、「トンバ」と呼ばれるナシ族の祭司が各種の儀礼や占い、呪術的な治療などを行う際に用いるものである。

トンバ文字は、これまで一部の研究者たちによって「生きている絵文字」や「生きている象形文字」などと呼ばれ

ており³⁾、その「象形文字」としての外見が一見して特徴的なだけでなく、一つの文字が、一つの音節、形態素、単語、句、節、文、あるいは段落までも表すことができるという言語上の単位との非対応性や、読まれる時の主要な方向は左から右でありながら、時には上から下へ、時には下から上へ、さらには右から左へとランダムに進んでいくという非線状性が顕著な特徴として指摘されている⁴⁾。このため、トンバ文字で書かれた経典は、たとえナシ族であっても十分に読みこなすことは困難であり、長期にわたる学習を通してその内容を暗記しているトンバだけが正しく読むことができる⁵⁾とされている。

このような独得のナシ族の宗教経典を初めて外の世界に伝えたのは、一九世紀後半の宣教師や探検家であった。宣教師としてこの地域に滞在したフランスのデゴダン（A. Desgodins）やオランダのスハルテン（E. Scharsten）、また、探検家として知られるイギリスのジル大尉（William Gill）などは、この時期にナシ族の宗教経典やその写しをそれぞれの出身国に送っている。一八八五年には、フランスの中国学者であるラクペリ（Ferrien de Lacouperie）の論文によって、デゴダンやジル大尉のもたらしたナシ族の宗教経典が紹介され⁶⁾、二〇世紀に入ってから、フランスのバコー（J. Bacot）が、その著作の中でナシ族の文字

とナシ語の単語・文法などの概略を記述し、一部の宗教經典の翻訳も紹介した。⁶⁾

その後、西洋でのナシ族の研究において、最も重要な研究者として登場するのは、オーストリア生まれで後にアメリカ籍を取得した学者、ジョゼフ・ロック (J. F. Rock) である。当初、植物学者として雲南を訪れたロックは、一九二二年から一九四九年まで長期にわたってこの地域に滞在し、八〇〇冊を超えると言われるナシ族の宗教經典を収集した上、それらについて多くの翻訳や研究を残した。⁷⁾

一方で、一九三〇年から一九四九年までの時期には、中国人による研究も現われる。ナシ族で歴史学者の方国璋は、後の一九八一年に『納西象形文字譜』として出版されることになる宗教經典文字の字典⁸⁾の原著を著した。また、もともと杭州で絵画を学んでいた李霖燦は、雲南でナシ族の宗教經典に出会い、ナシ族のインフォーマントの助力を得て、自身で収集した經典の翻訳・注釈や研究を行った。⁹⁾さらに、言語学者の傅懋勳も、ナシ語の言語学的分析を基礎として、宗教經典の翻訳・注釈を行っている。¹⁰⁾

その後、一九四九年以降の中国大陸では、一九五四年に成立した麗江県文化館で、博識なトンバを招いてナシ族の宗教經典の翻訳作業が行われ、一九六三年から一九六四年にはそのうち二二冊が石版印刷されている。¹¹⁾しかし、その

後まもなく訪れる文化大革命の時期には、研究は完全に停止し、多くのナシ族の宗教經典が焼かれたと言われており、再びそれが日の目を見るのは、次節に述べる一九八〇年代以降のことになる。

以上に述べた一九六〇年代までの研究の概略からも窺われるように、ナシ族に関する研究においては、独得の特徴を持つトンバ經典が最も重要な研究対象であったと言える。トンバ文字のような独得の文字によって記された經典が、一種の未解読の文字資料という位置付けとして、当初から研究者の関心を集めたことは容易に推察できる。また、宗教經典の翻訳と注釈（特にナシ語の読音の記述を含むもの）という点から見ると、欧米ではバコーの著作に見られる翻訳を発端として、その後のロックによる翻訳と注釈がある。一方の中国では、まず傅懋勳による業績があり、次に李霖燦らによる翻訳と注釈が質量ともに高いレベルに達しており、一九四九年以降の中国大陸でも一定程度の研究が行われているが、その後、トンバ經典の翻訳と注釈の研究において、最も組織的で大規模であるという点で着目されるのは、以下に述べる一九八〇年代以降の中国大陸における動きである。

2. 東巴文化研究所による翻訳・注釈と

『納西東巴古籍注全集』の公刊

一九七六年に文化大革命が終結し、その後、次第に学問の諸分野における回復が始まった中国大陸においては、一九八一年、雲南省麗江県に「東巴文化研究室」が開設された。後の一九九一年に雲南省社会科学院の下部組織である「東巴文化研究所」となるこの組織においては、トンバ經典の翻訳・注釈作業が組織的に進められていった。ここには多い時で一〇名を超える専門の研究者が配置され、また、農村部から有能なトンバを招聘して研究所に常駐させ、文革前に収集されたトンバ經典を朗誦させてナシ語の読音を記録し、さらにそれを漢語に翻訳するという作業が行われていった。このような地道な作業によって得られた成果は、一九八〇年代には雲南民族出版社による「雲南省少数民族古籍叢書」の一部として公刊される一方、同研究所の売店⁽¹³⁾で販売する内部発行資料としても小規模に公開されていった。そしてその後、一九九九年と二〇〇〇年には、それまで続けられてきた翻訳・注釈作業の成果が、計一〇〇巻の巨大な全集として公刊されることになる。それが、表題に掲げた「納西東巴古籍注全集」（以下、『全集』と略記する）である。

全一〇〇巻からなるこの『全集』には、經典の冊数にし

て合計八九七冊が含まれており、一卷あたりの平均にすれば約九冊の經典が含まれていることになる。これまでで公表されてきたナシ族の宗教經典の翻訳と注釈（特にナシ語の読音の記述が含まれているもの）を、經典の冊数という点から見ると、ロックのものは少なくとも一三五冊があると言われるが、これにはかなり短いものも含まれている。また、中国の学者によるものでは、傅懋勳によるものが合計三冊、李霖燦によるものが合計九冊、麗江県文化館によるものが合計二二冊、一九八〇年代に雲南民族出版社から公刊された東巴文化研究所によるものが合計一四冊であり、これらに比して今回の『全集』における經典の冊数が如何に膨大なものであるかは言を待たない。

トンバ經典は、基本的にはその經典が用いられる儀礼別に区分することができる。トンバ教の儀礼には、天を祭る「祭天」、祖先を祭る「祭祖」、ス（署）と呼ばれる龍王を祭る「祭署」、死者の種類によっていくつかに分かれる葬送儀礼の「超度」など数多くの種類がある。『全集』では、それらの儀礼の性質や經典の用途によって、經典全体を五つの大分類に分け、その中でさらに個々の儀礼や經典の種類によって細かく分類・配列している。これを楊世光氏による『全集』の後書きにおける記述⁽¹⁴⁾を参考にして図示すると、以下に示した表のようになる。

『納西東巴古籍訳注全集』における經典の分類と配列

大分類	含まれる儀礼など	収録巻数	經典冊数	総頁数
祈福類儀式	祭天、祭祖、祭素神、祭村寨神、祭獵神、祭勝利神、祭署、延寿など	第一卷 第一五卷	一四七冊	四八三八頁
穢鬼類（消災）儀式	小祭風、穢塚鬼、退送是非災禍、除穢、祭呆鬼、祭端鬼、驅赶塚古鬼、祭猛鬼、閔死門など	第一六卷 第五四卷	三三七冊	一一五七六頁
喪葬類儀式	開喪、超度死者、超度什羅、超度拉姆、超度絶後鬼、大祭風など	第五五卷 第九一卷	三三一冊	一〇六二〇頁
占卜類儀式	占卜書	第九二卷 第九九卷	七二冊	二二五八頁
其他類	舞譜、薬書など	第一〇〇卷	一〇冊	三〇六頁

この分類においては、トンバ教における宗教儀礼を、各種の神や祖先などに対して祈祷するもの、災難を払うもの、葬送儀礼に関わるものの三つに分け、それに占いの經典とその他の經典を加えている。しかしながら、五つの大分類の中に含まれる個々の儀礼の分類の方法やその配列の根拠は必ずしも明らかでなく、なぜその位置に置かれているのかがよく分からないものもあるため、分類の細部においてはまだ検討が必要であると思われる。

『全集』の各巻に収められたそれぞれの經典のテキストには、始めにその經典のごく簡単な説明や内容の粗筋が書かれている。經典のテキストそのものの構成を見ると、ま

ず始めに經典の当該ページのモノクロ写真が掲げられ、次に、そのページに書かれている文字のナシ語の読音を国際音声学字母(IPA)を用いて表記したものに、それぞれの単語の漢語による逐語訳が付されたものが記されている。そして、經典での一ページ分が終わったところで、そのページの漢語による全訳が記される。さらに特に難解な語句などについては、脚注が付されていることもある。このような經典の注釈と翻訳の基本的な構成は、かつて傳懋勳や李霖燦が行った方法とほぼ同様である。しかし、言語学者である傳懋勳がその文字についても詳細な解説を加え、李霖燦がナシ語の読音のテキストに対応する文字をさらに細か

く対照させているのに比べると、『全集』の構成はかなり簡潔なものとなっている。

3. 『全集』の問題点と使用する場合の注意点

ナシ族によって話されているナシ語は、大きく東部と西部の二つの方言に分けられ、そのうち麗江県を中心に居住する「ナシ(納西)」と呼ばれる集団が用いているのは西部の方言である。一方の東部の方言は、寧蒗県の永寧郷を中心に居住する、「モソ(摩梭)」と呼ばれる人々によって話されている方言である。ナシ語の東部と西部の方言の相違はかなり大きく、両者が共通して用いる語彙は全体の六割程度で、当事者自身が通じると感じる度合いも全体のおよそ六割くらいであるという。そして、トンバ經典などの宗教經典は、圧倒的に西部の方言が話されている地域に分布している。

また、これまでの研究においては、ナシ語の西部方言の内部も、いくつかの下位の方言(「土語」)に区分されている。しかし、東部方言の下位方言間の差異が非常に大きいとされるのに比して、西部方言におけるそれぞれの下位方言間の差異はそれほど大きいものではないとされている。これは西部方言の下位方言間の差異は主に音声・音韻的な差異が主であり、語彙的・文法的な差異はそれほど大きく

ないためであると考えられる。

トンバ經典は、一種の經典独得の言語によって記されているものであるが、それがトンバによって語られるとき、その読音の基礎となるのはやはり話されている口語のナシ語の発音である。トンバは、どちらかと言えば麗江県の中心地である大研鎮などの都市部よりは、それを取り囲む農村部やより辺鄙な山間部の出身であることが多く、それらの地域ではナシ語の西部方言の中でのいくつかの下位方言が話されている。従って、トンバによる經典の読音には、トンバの出身地のナシ語の方言の影響が色濃く出ていると考えられる。

かつて一九四九年以前の中国において行われたトンバ經典の翻訳・注釈の研究においては、言語学者である傅懋勳は、その著作の冒頭で、インフオーマントであるトンバの話すナシ語について言語学的な記述を行い、その音韻体系を明らかにしている。また、李霖燦による研究では、李霖燦本人は本来絵画を専攻していたことから、彼の専門でない言語的側面については言語学者の張琨の協力を仰ぎ、やはりその著作の冒頭で、インフオーマントのナシ語の音韻体系を明らかにしている。トンバ經典の読音が、実際に話されているナシ語の音聲的基礎の上に語られるものである以上、經典の読音の記述を行うにあたっては、このような

検討は不可欠のものと考えられる。しかしながら、今回公刊された『全集』においては、経典を読んだトンバの出身地やその方言についてはほとんど触れられておらず、その音韻体系についての言及もない。また、その読音の表記を詳細に検討してみると、それぞれの翻訳者・注釈者によってかなりのばらつきが認められる。一九八〇年代以降の麗江の東巴文化研究所による研究においては、言語学的観点からの研究が欠落していることは否めず、そのことが今日の『全集』に直接作用していることは明らかである。おそらく東巴文化研究所では、これまでに中国の言語学者によって行われてきたナシ語の研究を参考にしながら、それぞれの経典の翻訳者・注釈者が、国際音声学字母の使い方を習慣的に習い覚えていったものと推察される。しかし、同研究所の学者たちの関心は、あくまでも言語そのものよりは

自民族の独特の文字や宗教文化といった側面にあり、また、ナシ語の各地の方言の音声・音韻の差異という問題は、ナシ語を母語とするナシ族出身の学者たちの間では、あえてそれを意識せずとも読音の記述にはさほど支障がないことから、あまり大きな問題とは捉えられてこなかったと思われる。そのため、彼らの研究においては、それぞれの経典の読音に用いられる、ナシ語の各地の方言の音韻の全体像という言語学的な問題は、ほとんど切り捨てられてしまっ

たと考えられる。しかしながら、ナシ族の特殊な文字そのものに対する研究が一種の行き詰まりとも思われる状況を呈している今日、より必要なのはトンバ経典の音声・音韻の側面に対する視点であると考えられ、『全集』がそれを置き去りにしてしまったことは、この資料の量的な優位を考えると、極めて惜しまれることである。

また、『全集』に収められた宗教経典には、一部を除いて、経典の所蔵者や収集当時の状況などといった、その経典の具体的な来歴を伝える情報がほとんど記されていない。そのため、このこと自体が資料の信憑性に対して一定の留保を迫ることも避けられない。一方、『全集』に記録されているナシ語による経典の読音は、東巴文化研究所に常駐していた一〇人のトンバによるものである。そのため、本来の経典の持ち主による朗誦と、『全集』が記録する研究所に常駐していたトンバによる朗誦との間には、何らかのずれが存在することも考えられる。というのも、トンバ経典とその文字の読み方や書き方には、そのトンバ個人の特徴も存在すると言われているからである。しかしながら、経典がトンバにしか読めないものである以上、『全集』に示された内容からだけでは、このような問題を検討することは不可能である。もともと、『全集』に収められた多くの経典が、収集されてから文化大革命時期の混乱を経てい

るであろうことから、この問題についてはやむを得ない側面もあるであろう。

『全集』の成立過程に由来するもう一つの問題として挙げられるのは、その地域的な偏りの問題である。トンバ教では、現在の行政区画において麗江県の北に位置する中甸県に含まれている、三壩ナシ族民族郷が一種の「聖地」とされており、その地域のトンバは高い地位を保ち、これまでのトンバ教の研究においても非常に重視されてきた。しかし、今回の『全集』において經典の朗誦を行っているトンバは、ほとんどが麗江県内の出身である。これには、『全集』が作られる過程での、麗江県を中心に編纂してゆくこととする政治的な意図が作用していると考えられるが、ナシ族の宗教經典が実際には行政区画をまたがった形で分布する以上、このような方向性はバランスを欠いたものである上に、これまでに中国の研究者によって行われてきた、中甸県三壩郷をトンバ教の「聖地」として重視する先行研究との間にも結果的に矛盾を見せることになった。

以上に述べたように、今回公刊された『全集』は、量的には右に出るものはないことは確かだが、質的にはまだまだ未解決の問題が多く残されていると言える。従ってこの『全集』を様々な研究の資料として使用する場合には、その質的な問題に注意を払う必要がある。經典に記されてい

るナシ語は、実際にナシ族によって話されている口語のナシ語と完全に同じではなく、その文体や語彙・文法には經典獲得の要素も見られるが、一方では口語とほぼ同一の要素が使われていることもある。両者に共通のものが見られる場合については、可能な限り言語学者によってなされたナシ語の先行研究を参照し、『全集』における表記や記述を検討することが必要である。また、經典のテキストの内容についても、もし使用したいテキストとほぼ同じものやその翻訳が、それまでに他の形式で公刊されている場合には、両者を逐一比較対照してから使用するという配慮が不可欠である。

註

(1) 中華人民共和国国家統計局『中国統計年鑑二〇〇二』(北京：中国統計出版社、二〇〇二)、p. 97。

(2) 現在のナシ族の中に含まれている寧蒗県永寧郷を中心として居住するモソ(摩梭)人と呼ばれる人々については、特徴的な訪妻婚についての研究が関心を集めてきた。しかし、麗江県を中心として居住するナシ族とこのモソ人との間には、言語的にも文化的にも一定の違いがあり、特にトンバ經典などの宗教經典についてはモソ人の地区にはほとんど分布していないとされる。そのため、

ら)では西部方言のナシ族に限定して述べる。

- (8) 万国瑜・和志武『纳西象形文字譜』(昆明:雲南人民出版社、一九八二)。
- (9) 李霖燦・張琨・和才『麼些經典譯註九種』(台北:國立編譯館中華叢書編審委員會、一九七八)など。
- (10) 傅懋勳『麗江麼些象形文、古事記研究』(武昌:武昌華中大学、一九四八)。またこの他にも、この時期の調査に基づき後に公刊されたものに、傅懋勳『纳西族图画文字《白蝙蝠取経記》研究(上・下)』(東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、一九八一(上)・一九八四(下)などがある。
- (11) 郭大烈・楊世光『東巴文化論集』(昆明:雲南人民出版社、一九八五)、p. 488や、佐野賢治編『西南中国纳西族・彝族の民俗文化——民俗宗教の比較研究』(東京:勉誠出版、一九九九、pp. 585-586には、これらの目録がある。
- (12) 雲南省少数民族古籍整理出版規劃辦公室編『纳西東巴古籍訳注(一)』(昆明:雲南民族出版社、一九八六)、『纳西東巴古籍訳注(二)』(同上、一九八七)、『纳西東巴古籍訳注(三)』(同上、一九八九)。
- (13) 佐野賢治編上掲書、p. 386には、これらの内部発行資料計二二冊の目録がある。また、筆者はここに挙げられていない四冊も同じ売店で入手している。
- (8) Joseph. F. Rock, "Studies in Naxhi Literature," *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient*, 37 (1), 1937, p. 1°. また、西田龍雄『生きている象形文字』(東京:中央公論社、一九六六)、西田龍雄『生きている象形文字』(東京:五月書房、二〇〇一)など。
- (4) Harald Bockman, "The Typology of the Naxi Tomba Script," *Ethnicity and Ethnic Groups in China* (Chien Chiao and Nicolas Tapp, eds.), Hong Kong: New Asia Academic Bulletin, 8, 1989, p. 154°.
- 西田龍雄『ナシ象形文字』『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』(東京:三省堂書店、二〇〇一) p. 684°.
- (5) Terrien de Lacouperie, "Beginnings of Writing in and around Tibet," *Journal of the Royal Asiatic Society*, n. s. 17, 1885, pp. 459-466.
- (6) Jacques Bacot, *Les Mo-so: Ethnographie des Mo-so, leurs Religions, leur Langue et leur Écriture*, Leiden: Brill, 1913.
- (7) Rock 上掲論文と Joseph. F. Rock, "The Romance of K'a-mä-gyu-mi-gkvi," *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient*, 39, 1939, pp. 1-152など、多数の研究がある。

(14) Pan Anshi, "The Translation of Naxi Religious Texts," *Naxi and Moso Ethnography* (Michael Oppitz and Elisabeth Hsu eds.), Zürich: Völkerkundemuseum Zürich, 1998, p. 275.

(15) 「ス(署)」は、一般には「龍王」とされるが、漢族の神話における龍とは同じではない。これについては斎藤達次郎氏による考察がある(「ナシ族の龍説話」『人文科学論集』四一(一九八七)(名古屋経済大学・市邨学園短期大学人文科学研究会)、「ナシ族の龍説話とトンバ教開祖」『比較文化研究』七(一九八八)(比較文化研究会))。

(16) 『全集』第一〇〇巻、p. 340。ただし、細部の儀礼の名称については、楊氏の記述が『全集』の記述と噛み合わない部分もある。

(本稿は、平成一五年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。)

一九九九年九月〜二〇〇〇年九月、雲南人民出版社、昆明、A四判、全一〇〇巻、各巻二〇〇頁〜四〇〇頁程度(最小一四〇頁、最大四八六頁)。